

社会福祉領域におけるレジリエンス研究の今日的意義と展望

—社会的排除から包摂的社会へのキーターム—

○ 東大阪大学短期大学部 門永 朋子 (5049)

キーワード：レジリエンス、防御推進要因、包摂的社会

1. 研究目的

レジリエンス (resilience) は、おおむね 1990 年代後半から北米の対人援助専門職のあいだで広がりを見せている、援助の概念枠組みである。わが国では 2000 年代以降、心理、精神医療、看護、教育等の領域において、レジリエンスに関する本格的な調査研究の進展がみられるものの、社会福祉領域では断片的な紹介にとどまっており、体系的な概念整理や実践レベルへの応用の可能性については十分に検討されていない。

本研究の目的は、以下の 2 点である。第 1 は、レジリエンスに関する先行研究を精査し、レジリエンスの概念を体系的に整理して提示することである。第 2 は、社会福祉領域におけるレジリエンス研究の意義を考察することである。より具体的には、近年のわが国における社会福祉の諸課題に対してレジリエンスという概念が貢献しうる点について検討することをおして、社会福祉領域におけるレジリエンス研究の今日的意義を論じる。

2. 研究の視点および方法

レジリエンスには明確な定義がなく、研究者によって異なる。本研究ではレジリエンスの関連用語に、フレイザー (Fraser et al 2004=2009) らの概念定義を用いた。フレイザーらによれば、レジリエンスは、「逆境にもかかわらず、良好に適応すること」と定義される。

レジリエンスに関する諸領域での研究は、子どもを中心に発展してきた。その理由として、子どもは心身の発達を客観的に観察しやすいこと、発達上の可塑性の高さといった観点から研究成果が明確に現れやすいこと等が挙げられる。一方で、研究の黎明期から今日まで、欧米では、統合失調症等をはじめとする精神疾患のある成人を対象としたレジリエンスの調査研究も蓄積されている。その結果から、成人、とりわけ中高年期以降もレジリエンスが認められることが知られている。

本研究では、報告者がこれまで実施してきた社会的養護のもとにある子どものレジリエンスに関する研究の結果を土台としながら、レジリエンス研究の意義について社会福祉領域全般に敷衍して論じる。研究の方法は文献研究である。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守している。また報告のなかで一部紹介する調査協力児童への調査については、未成年を対象とする観点も含めて、

報告者が所属する機関（調査実施当時）の研究倫理委員会の承認を得て実施した。なお、本研究は、平成25年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））「子ども家庭福祉実践におけるリスクとレジリエンスの視座の指針と評価指標の作成」（代表研究者：山縣文治（関西大学教授））の一環として実施したものである。

4. 研究結果

研究結果は以下の3点から整理できる。第1は、レジリエンスが生態学的マルチシステムの視座に立脚し、エンパワメントやストレス視点の流れを汲む概念であることを、先行研究の精査をとおして整理した。なかでもストレスは、レジリエンス研究では概念上、「防御推進要因」と呼ばれる。抽象的な概念であったストレスを、エビデンスに基づく防御推進要因として可視化・具現化したレジリエンス研究は、社会福祉の理論と実践に新たな観点をもたらす。さらに、防御推進要因には、逆境を構成する「リスク要因」の望ましくない影響を緩和・軽減するはたらきがある。逆境に直面しながらも、防御推進要因を活用して良好な適応状態へ向かうという考え方は、子どもだけでなく、広く社会福祉領域の対象である人々に対する援助の概念枠組みを強化するとともに、従来の社会福祉の概念ではカバーしきれなかった人々へ目を向け、アプローチすることの根拠ともなる。

第2は、本研究の土台となった児童養護施設入所児への調査結果と関係することである。この調査では、入所児がレジリエンスに至る過程には、様々な社会的資源との良好な相互作用があることが明らかにされた。これらのことは、レジリエンスという概念が、子どもに限らず、生活上の困難から社会関係を断たれる等の経験をした個人を再び社会に包摂していくための視点を、社会福祉領域の実践者と研究者にもたらすことになる。

第3は、近年、重要視されている、予防的ソーシャルワークへの寄与である。ソーシャルワークにおける予防的支援は、(1)早期発見、(2)早期対応、(3)見守り、(4)健全状態の維持、の4つのアプローチからなる（岩間 2012）。レジリエンスの核となっている考え方は、リスク要因を見極め、その発生を未然に防ぐ防御推進要因を配置することである。この考え方は、上述の予防的支援を補強する枠組みを与えることになる。

5. 考察

本研究では、レジリエンスがエンパワメントやストレスの視座の流れを汲むものであることを示した。また、レジリエンスは抽象的な概念ではなく、エビデンスに基づいた、実践志向性の高い援助の枠組みであることを明らかにした。さらに、レジリエンスの本質的な部分を理解することをとおして、従来の社会福祉の対象だけでなく、新たなニーズをもつ人々にも対応しうることを提示した。今後の課題としては、わが国の社会福祉領域におけるレジリエンスの定義の明確化と、レジリエンスに基づく社会福祉実践の具体化が挙げられる。